川崎医会誌一般教，34号 50—78(2008)

翻訳『闇の大地に』

（原題　"Auf Dunkelm Grunde＊" Eine Skizze）

ヴィルヘルム・ラーベ作／永末和子訳

（平成20年9月29日受理）

Übersetzung des Wilhelm Raabes Werkes "Auf dunkelm Grunde"
von Kazuko NAGASUE übersetzt

Übersetzer : Kazuko NAGASUE
Department of Foreign Languages , Kawasaki Medical School,
577 Matsushima, Kurashiki, Okayama, 701-0192, Japan

(Received on September 29, 2008)

「それじゃ、あなたはすべてにわたって同意するというのですね。」

「ええ、もちろん、もちろんですとも。くだくだしいことも、まわりくどいことも言う気はないのです」と、イーオ[1]は急きこんでいった。以前はいわゆる「口滑らかなおじょうず娘」で通っていたのだが、しかし今は二人の何にもましてかわいい小娘の幸せな母親であった。もっともこの二人はまだここでは登場せず、目下のところ宮廷顧問官夫人ジルバーシュナーベルのお邸でダンスを習っている最中であった。

「私は、私どもの願いと意志とをはっきりと申し上げたつもりでございますけれど」と、カルリアナッサ[2]は言った。

「ええ、まあそりゃ、おっしゃるとおりでございますとも。」と、苦しい立場に追い込まれ、ひらひらと飛ぶ蝶のようにそわそわと落ち着かないようすで、笑いながら言い、美しい御夫人連の輪を見回した。それから彼は深く思いに沈みながら両手に額を埋めた。と、やがて、突然、彼は聞き耳を立てた—

「あれは何です。お聞きになりませんでしたか。ほら、また。何が起きたのでしょう。また、いったいなにでしょう。」

御婦人たちはこぞって耳を澄まし、息を詰め、カーテンの降りた窓のほうを注視した。夕闇が暗さを増し、嵐含みとなりながら、風は、可能な限り、警察命令だってなんだって押し返す勢いで吹き付けた。雨は、片時も中断することなく窓ガラスを叩き続けた。

「まあ、いったいなんですの。—私どもはいっこうにそれらしい物音など聞きませんでしたけれど。」と、銘々の魅力的な口元からすずやかなことばが転がり出た。

「耳を澄ましてお聞きなさい、じっと澄まして。あれは遠くかなたの野生のごとく荒ぶる民衆の群れが立てる騒擾のようではございませんか。—耳を澄ましてお聞きなさい。渦巻く太鼓の音・・・耳を劈く甲高い叫び声。・・・彼が死んだ。」

カルリアネイラ[3]は彼女の背の低い、刺繍をした小さな椅子から半ば飛び上がるように腰を浮かした。ほかの者たちも驚き、身を寄せ合った。

「誰が、いったい誰がですの。誰が死んだというのです。・・・なんていうことでしょ。何が、何がいったい起きたというのです。誰が死んだというのです。」

「落ち着いて、皆さん。」と、陰気な声で語り手は言った。「エグモント[4]が死んだのです。―ラモラール・フォン・エグモント伯、あのフォン・ガウレ王子がですよ。―お芝居はもう終わりです。私は枢密顧問官区を走る馬車の音を聞いたのです。」

「まあ、なんていう冗談を」と、半ば笑い、半ば腹を立てながら、アマテイア[5]が叫び、彼女の美しい巻き毛の頭部を軽く振った。しかし、語り手はことばをついだ。

「あなた方は皆さんこぞって落ち着きがなく、水銀の玉のように絶えずころころとして、物見高く、感謝知らずの民衆なのですね。あなた方の注意を惹きつけ、集中させることは、大変なことのようです。骨折りが報われるかどうか、そのことについちゃ、学者先生たちもまだ統一見解には達していないようですがね[6]。」

「あら、あら、あら、彼の言うことを聞きましょう。」と、ご婦人方はみな口々に言った。それには構わず語り手は話し続けた。

「やれやれ、あなた方はようやく訝しく思いつつも、黙って耳を傾けて聞く気分になったようですね。小生意気で無内容な注釈を差し挟もうとせず、更に、どこで、どんな風にとか、何故とかいった質問を投げかけようともせずにね。」

「ええ、ええ、そうしましょう。恥知らずさん。そんなひどいことをよくもまあ。でも、まあ、とにかく聞くことだけはいたしましょう、マイスター・フォン・シュテュール殿[7]。」

「それはともかく」と、語り手は話し始めた。「底の底まですっかりはたき出すということに致しましょう。」

*

街灯がゆらゆらと揺れる光を心地よく暖まった部屋に投げかけていた。戸外では横丁のガス灯が烈しい風に煽られるたびに、ちらちらとガラスの器の中で落ち着きなく明滅を繰り返し、そのたびに部屋の中では光と影が、アラビアの妖精物語のなかの幻想と理性のように、また乙女の心のなかのイエスとノーの呟きのように、ダンスを繰り返していた。部屋はそんなに大きくはなかった。が、しかし、既にお話したとおり心地よかった。花模様の絨毯が床をおおい、魔法は冬の宵にありながら、夏の草原の華やかさを呼び出していた。システィナ礼拝堂のマドンナを髣髴させる高価な銅版画が、幅広の黄金色の縁取りのある寝椅子の上に懸かっていた。そしてもう一枚のかなり大きな絵が、既に黄昏はじめてほの暗い闇に包まれ、はっきりしなかったけれども、その向かい側に懸かっていた。寝椅子の前には、紅色のテーブルクロスの上に白いナプキンを載せた円形のテーブルが置かれていた。その上には、同じように簡素ながら、趣味のよい紅茶セットとまだ明りの点されていないランプとが並んで立っていた。

部屋には、新鮮な花や繊細な細工の香炉から立ち昇る、そこはかとない上品な芳香が漂っていた。冬の嵐は、部屋を支配する同一の感情、みなの意識の底にある同一の安全感の輪のなかに適度な驚愕をご披露

していく傍らで、その心地よさの意義を一層高めることを許されていた。そう、それは親しい、顔見知りの顔ぶれの輪の居心地のよい暖炉の傍らでこそ語られるべき、あるぞっとする話、みなの意識の底にある、ある話が持ち出されようとするそのときなのだ。

そして薄暗がりをひとつの影が、ひとりの女性の影が、部屋の中で戯れ続ける陰と光のなかを抜けて、動いた。静かにすずやかに音もなく歩み、床を向こうへ、家庭という秘密安全保障領域[8]の守護霊は滑るように行く。彼女は窓辺により、夜と雪嵐の闇を覗き込む。戸外のガス灯がひときわ明るい輝きを彼女に投げた。彼女の容貌をもっと踏み込んでお話できるものなら。しかし、この瞬間に彼女は顔を窓ガラスにひたと押し当ててしまったのだ。通りで手間取ってしまった彷徨者ならば、多分、可能だったでしょうが、部屋の内部で耳を澄ましている語り手には、その容貌のいくばくかを覗うことさえ叶わなかったのだ。テーブルの上の明かりが点されれば、そのときこそいよいよ我々はその顔の細部を知ることができるというものです。それまで皆さん、どうかしばらくご辛抱を。

拭っても、忽ち曇り、何も映さぬ平らなガラスの鏡はその外貌を横丁に許しただけで、夫人は再び部屋の中央へ、あるいは、ひょっとすると暖炉の方へかもしれないが、戻って行きかけて、ふと物思いに沈んで立ち尽くした。そのまま黙ってか、ひょっとするとほんの僅か、かすかに口ずさんだのかも知れないが、歌の一節を口の中で唱えた。しかし、改めて窓のほうへ引き寄せようとする抗し難い力が相変わらず彼女を引き留めているようであった。が、遂に背の低い、どっしりとした肘掛け椅子を暖炉にぐっと近づけて、身をまかせて座った。しかし、落ち着かなげな様子だった。

さっと閃光を放って、湿ったガスのように発散する飛沫[9]が窓ガラスを再び覆う—お聞き、ほうぼうの横丁で吹き荒れる風の音を。聞き耳を立てて—横殴りの雪が窓ガラスを滑り落ちて行く様子に耳をお澄まし。

二つの窓間にかかった鏡の足もとに大理石のテーブルがある。その上には一体のアラバスタの白皙の女性像が足元で静かに時を刻む時計に寄り添って立っている。彼女は唇に指を触れている。なのに今、・・・語り手は語り始める。

二十七年。短い人間の一生にとって、それはどういう時間を意味するのか。このような時間の流れに落ちてくる喜びの内容はなんとほんの僅かなことばで締めくくられて終わりとなることか。—しかし、この地上の苦しみを訴えることのために、人間は永遠という何世紀にもわたる長い時間を要する。このほんの二十七年間という短い、この世の苦しみを訴えることのためにさえ。二十七年はまるで一瞬のように過ぎ去り、過ぎ去って—しまったのだろうか。

二十七年間はこうしてやってきた。市門の前の公園のイボタの樹の緑の繁みの陰で、一人のうら若き女が腰をかけ、無心に、何かの考えに満たされながら、日傘の先で様々な形や文字を砂に描いていた。

女性は蒼白い顔をし、病んでいた。だが、非常に幸せだった。

ああ、座ったままの彼女のまなざしは向かい側の木立の切れ間になんと釘付けになっていることか。この樹の繁みでは、あるときはそっ

と、あるときは賑やかに、蝉が鳴き小鳥たちが囀り、ささやかながら希望に溢れた家政のきりもりの最中の様子を告げていた。そして太陽はなんと明るく生き生きと、小枝の繁みを突き抜けて輝いていたことか。少し離れた緑の遊び場から、子供たちの声がなんとも陽気な響きを乗せて、聞こえてきた。―　―　―

「お母様」と、蒼白い顔をした女はそっと、そっと声なく囁いた。彼女の眸は最高の祝福を受けた妊婦の甘い歓喜の涙に溢れていた。

「お母様。」・・・

座れる女は夫の足音が消えた茂みの方角にぴたりと耳を澄まし、そして胸を抱き締め、涙を超える微笑みにほころんでいた。

「お母様。」・・・

あれは何なのでしょう。太陽の前を雲がよぎったというのでしょうか。でもこの雲ひとつない青空に、それはいったいどこから、予想もしないときに、突然、現われたのでしょう。

この夢見る若い女は、まったくもって突然、いったい何に正面衝突し、ぎくりと身を縮ませ、天を仰ぎ見たというのか。・・・

太陽をよぎる雲などなかった。太陽はただ明るく照り輝き、慈悲深く照らしていた。ただ黒い喪服をまとったひとりの夫人がゆっくりと緑の遊歩道を、驚愕し夢見る女性の座っている方向に歩いてくるばかりのことであった。

夢見る女の心の奥底まで貫き、こんなにも不気味な戦慄を起こさせたものとは一体なになのか。彼女は近づいてくる見知らぬ女性が誰だか知らなかった。実際、今まで一度も会ったことはなかった。しかし、にもかかわらず、この一瞬に、氷のように冷たい手が彼女の脈打つ心臓にじかに触れたように感じられ、あたかもこの見知らぬ女性の接近がすべての緑と光を、花と青空を、鳥の囀りと子どもたちの歓声を、黒いヴェールで一気に蔽尽くすかに思われたのだ。

死の輪に引き入れる意志の蛇の目に射すくめられた不幸な生き物の目のように、この若い女性の目も見知らぬ女性に吸い寄せられていた。近づく見知らぬ女性は蛇同様に接近しつつ、凝固した冷たいまなざしを向けていた。

マリーエ・イリガーは手を額にもっていき、そして、死ぬほどの不安のなかで敢えて微笑もうとするあの微笑をつくってみようと努力した。彼女のような状況に置かれるとき、一切は透徹した直視の前に置かれ、あの稀とばかりはいえぬ瞬間のひとつが襲う。世界はすべての美を剥ぎ取られ、瞬時にすべてが露出し、精神の眼前で死と化して横たわり、深淵が大きく口を開く瞬間なのだ。つい最前まで天国の花園以外の何ものでもないものが広がっていたというのに、その同じ場所に深淵が口を開いたのだ。そのとき、打ち合わせる手は音を失くし、しっかりとした支えは姿を消す。救いを求め、愛するものを呼ぶ声は無音に変わる。そこでは無関係の空しい人の形姿をした人々の影さえが憎悪し、吼え声をあげ、威嚇を剥き出しにする生き物へと一転し、その傍らで、もがき、考えを纏めようと必死の思いを心に湛えながら、一言も発せずに凝固し、すべてがあまりに、あまりに明白に拒まれた心の前に晒されているがゆえに、ただその瞬間に気を失うことだけが救いとなり、狂気から救出される手立てとなる空隙のいっときが彼女

を襲った。

「彼女は通り過ぎるだろうか・・・。彼女は通り過ぎないのだ。・・・彼女はおまえに話しかけるだろうか。・・・そうなるのだわ。」かわいそうなマリーアの頭のなかは渦巻いていた。両手は小刻みに震え、膝の上に組まれていた。そして頭はうなだれ、深く胸にかかっていた。鋭く、翳りのない声が傍らから彼女にこう質問してきた。

「お加減でも悪くていらっしゃるの。どうなさいましたの。まあ、ご病気ですわ。」

訊ねられたものは再び眼をあげざるを得なかった。恐怖の対象の見知らぬ女は彼女のそばにひたと立っていた。彼女はマリーアを、今まさに座っている場所から引きずり下ろそうとするかのように、腕に抱き取った。マリーエ・イリガーは、蛇が自分の獲物を締め付けてくるのを知った。彼女はこのものの呪縛には救出がないことを知ったのだ。

「オイゲン、ああ、オイゲン。」と、彼女は締め付けられる声を振り絞って叫んだ。

見知らぬ女の目から一瞬の閃光が放たれた。

「気を落ち着けて。すぐに済みます。私の香水をお嗅ぎなさい。すぐに気分がよくなりますよ。」

彼女は若い女の横、ベンチのようになった緑の芝生の上に座った。神々しい太陽の華やかな色彩の戯れの只中に、さえずる小鳥の巣の真向かいに、そこら中のものすべてが歓喜の声をあげている生のただなかに緑の芝生のベンチはあった。

すると彼女の心に憎しみが乗りうつり、舌に載った毒は—思いやりのあることばと質問と忠告の形をした甘い毒を含んで行った。

「いいえ、私、あなたをお煩わせすることなどできせんわ。弱さがちょっと表に出ただけですの。どうかあなたのお隣にほんの少しこのまま座らせておいてくださいませ。」

しだいに気を失った無感覚は消えていった。それとともに病んだ若い女の耐え難い心の状態も消失していった。ものごとは再び日常の色彩を取り戻した。—しかし元通りだっただろうか。ああ、決してそうではなかった。この身元不明の、親切な夫人の差し出した救助を拒絶することは、そう、まったく不当なこととなったのだ。

「まあ、ほんとうにありがとうございますー御親切さまでございます。何がどうなったのか、ほんとうに私には分からないのです。どうぞ、失礼をお許しください。まだ目の前が真っ暗なのです。きっと気絶してしまったのですね。ちっとも覚えておりませんけれど。」

見知らぬ女は微笑んだ。

「お大事になさいませんと、あなた。あなたをひとりぼっちに放っておくなんて事、すべきでございませんのに—」

「ああ、オイゲン—私の夫—はそう遠くにはいませんの。ほんの少しだけひとりになりたかっただけですのーオイゲンはとてもいい人ですわ。」

かわいそうなマリーエは、彼女のことばで傍らにいる女の心臓を鋭く突き刺したのだということに少しも気づいていなかった。

「私はとても幸福ですの」と、マリーエ・イエーガーは小さな声で呟いた。

「そして私は不幸ですわ」と、片方がこたえた。そこでマリーエは見知らぬ女の喪服姿に目をおとし、その女の手を握り締め、しばらく沈黙した後、語り始めた。

「私は全世界が幸せであってくれるようにと願っています。」

「私の話をお聞きいただけますか。」と、見知らぬ女は問うた。「あなたは初めてお目にかかる方ですし、きわめて確かなことですけれど、決して再びお会いすることもございませんでしょう—」

「ええ、どうぞ、どうぞ。あなたのお苦しみをお話しくださいませ。喜びを分かち合うことは、確かに甘やかな味の致しますことですけれど、苦しみを互いに分かち合えば、苦痛も半分になってしまうというものじゃございませんか。あなたがいま丁度、私にしてくださいましたように—」

「いまいったことをよくお考えになることですわ。私はたったひとこと申し上げれば、それで行ってしまいます。—あなたは若く、幸せで、希望に満ちておいでです。—私はあなたのまだお若くていらっしゃる人生に陰を投げかけることだってするかもしれませんのに。」

「いいえ、まあ、そんなこと決してございません。私は喜んであなたのお話に耳を傾けますわ。行っておしまいにならず、お話しください。あなたと共に涙しましょう。どうか、お話しください。こうしてわたし達を引き合わせた運命が、わたし達を近付け、ほんとうにこの一瞬にぴったりと接近させてしまうつもりがなかったかどうかなんて、誰にも分かりません。どうぞ、どうぞあなたのお悩みを私にお話しください。」

彼女は見知らぬ女の冷たい手を彼女の燃える手で包んだ。そして彼女の泳ぐまなざしをしっかりと彼女の傍らの冷たく、凝固し、賢く、聡明な目に注いだ。

「あなたがそれを望まれたのですよ、何がどうなろうと」と、見知らぬ女は言った。「それは話せば長いことになります。けれど簡単に、極めて短くしてお話しましょう。私はこの町の者ではございません。北ドイツ出身なのです。父は裕福な商人でした。ああ、そうですわね、町の名なんてこの際重要じゃございません。父は一年前に亡くなり、兄も既に亡くなっています。姉は誰一人として認めることのできぬ結婚を致しました。そして私どもの許を、結婚して出て行ったのです。私はひとり取り残されました。この世で全くひとり、身寄りのないものとなったのです。私は随分老けて見えますけれど、実際はそれほどでもございません。まだ若い、そう、大層若いのです。人の人生ではほんの数時間のことが数年の重さほどになることが、しばしば起こるものです。あなたもやがてそういう経験をなさるでしょう。私の父は苦悩のあまり死にました。兄は私の、わたしの代わりに死んだのです。」

「あなたの代わりに死に赴いたとおっしゃるのですか」と、マリーエ・イリガーは問うた。「まあ、なんてことでしょう。」

「ええ、そのとおりですわ。兄にはひとりの友人がいました。彼は私どもの故郷の町で兄と共に勉学に励んでいました。そして兄は彼を私どもの家へ、歓迎される客として私どもの家族に迎え入れたのでした。オイ・・、名前はともかくこの若者は初めのうちはおどおどとしておりました。そして私も。しかし、次第に私達は互いに信頼しあう

ようになりました。わたし達が二人きりになったとき、初めてわたし達は互いになんと言えばよいのか分からないことになりました。でも、それはいつまでもそういうわけには行きませんでした。あるときフランツィスカが—私の姉の名はそう申しますけれど—、笑いながら、わたし達を駆り立てているものが何であるのか申しました。でも私がひどく怒ったので、そのことを二度と口にしようとはしませんでした。彼女は随分気弱な性質でした、かわいそうなフランツィスカ。私のほうはというと、随分気の強い子でした。でも、あの人に対してだけは弱かったのです。彼は私に、私を愛していると言い、私は彼のことばを信じていました。私の兄はわたし達の婚約の証人になり、それで一層親密になっていったのです。そうした関係が一年そこら続きました。ほんとうに私は彼をとても愛していました。今、丁度それと同じくらい憎んでいるのですけれど。」

マリーエ・イリガーはこの瞬間、彼女に注がれた視線に恐怖を覚え、目を伏せずにはいられなかった。

「ああ。」

「彼はまだ生きています。あのひとでなし。彼は幸せです。が、彼の手は血塗られているのです。」

「ああ、なんてひどいことを。」

「血。私のかわいそうな、誠実な兄の血なのです。つい十二日前のこと、兄は荒れ果てた父の家で亡くなりました。私は彼の墓所を詣でてそこから参りました。— この芝生のベンチとあの芝生に覆われた墓との間には何マイルもの距離があります。・・・わたしの婚約者は緑の木々の背後のあそこの町の出自なのです。—私は彼を探しているのです。・・・でも私は私の慰めようのない話を終わらせますわ。日が暮れます。あなたはもうお帰りにならなくては。この冷気や暗さの中にこれ以上いらしては、あなたのお体にお障りいたしますわ。暗闇が、夜が勝ってまいります。ああ、私は夜を知っています。それは恐ろしいものです。私の婚約者は勉学を終えると、ひどく蒸し暑い最中でしたが、出発しました。最初の頃は手紙を嵐のような情熱をこめて書いて遣しました。私は彼ほどうまく、荒々しいほどの情熱をこめて書くことなどできません。私の手紙は私に留まったのです。そしていっぽう彼の炎のような情熱は私の姿が遠くへ後退するにつれ、やがて段々冷えていったのです。次第に南部から届く手紙は間遠になり、冷たくなっていきました。私はそのためにきっと口数も少なくなり、顔色も血の気を失っていったのでしょう。—私は病気となり深刻な事態となってしまいました。私は苦しみに沈み、憔悴しました。兄はほどなく私と彼の友人のあいだにあるべきものがいっさい消え失せていることに気づきました。彼は父の家にあって、唯一信頼できる人間でした。わたし達の間で何が起きたのか知りたいと申しました。私の心とその煩悶を彼に白状せざるを得ませんでした。—「私が彼に会いに行こう。彼をつれて帰ってくる。あちらで何が起きたか直接知る人間ならば、お前を慰めてあげることができよう。彼は誠実な男だ。そういうことは私が請合う」と、兄は言い、出発しました。ああ、私の心は兄の旅に連れ添っていっしょに旅しました。私の婚約者は私に彼の故郷のことをよく話してくれていましたのです。彼の故郷の町に続くぶ

どう畑、連なるぶどう畑の丘陵の間を流れる川のこと、誠実で善良な人々のこと、—私はそれもこれもみんなよく知っていました。私の思いは兄よりも先立って歩いていました。—事実が明らかになる。—ならねばならぬ—そうすれば万事よくなる—彼は病気で、悄然としているのだ—彼はまだ私を愛している—彼が私のことを忘れるなんてことがあるだろうか。」

「それで、それでどうでしたの。」と、マリーエ・イリガーは祈るように両手を合わせ、胸にあてながら、訊ねた。

「それで結局、彼は私をもはや愛していなかったのです。わたしのことを忘れてしまっていました。」と、問われた相手は息苦しくなりながら、そういった。

「まあ、なんてひどい人、不誠実な人なのでしょう。」

「私は兄からの手紙を受け取り、それを二年前からいつも胸にいれて歩いていますの。それをお見せしましょう。」

語り続けながら、女は胸の窪みから小さな黄金色の容器を取り出した。ぱちんと開いて、小さくまるめた紙片を取り出し、小刻みにふるえるマリーエに渡した。ちらつく目で、この者は性急に書きなぐられた手紙の行を追った。

それらの行はこう伝えていた。

「親愛なるかわいそうなメータ。

お前がこの手紙を手にする瞬間に、神がこの世であるとき不正に対し報復を加えようとなさるなら、お前の復讐が完了することになるだろう。私は彼に会い、彼に語った、あの低劣な奴に。元気をお出し、私のかわいそうな子。あの薄情者はお前を欺き、他の女を愛していた。彼の言うには、彼の親類が無理矢理押し付けたとかいう女を。それは怯懦な嘘だ。彼女は彼に押し付けられたのではない。卑怯で低劣な嘘つき。—いいかね、たとえ仮に彼が望んだとしても、私は彼がお前のところへ戻ってくるなどということは決して許しはしない。私は彼の顔をぶん殴ってやった。できれば床に叩きつけてやりたかった。婚約指輪はこちらに送り返してやりなさい。箱の中にはもしかして私が帰って行けなくなった場合を考えて、二通の手紙を入れておく。一通はお父さん宛のものです。もう一通はフランツィスカ宛のものです。だが、私は帰る。きっと、きっと。

お前の誠実な兄

ルートヴィッヒより」

マリーエ・イリガーはことばもなく手紙を膝においた。見知らぬ女はそれを取り戻した。

「ええ、彼は帰って、帰ってはきました。」彼女は力を振り絞ってほとんど金切り声で叫んだ。「彼らは殴りあったのです。そして—段々に衰弱し、ゆっくりとした死路をたどりながら、兄は父の家へ戻ってきました。二年間、彼は胸の傷がもとで長患いとなりました。そして遂に私は—」

「まあ、なんとすさまじいことに—痛ましい、痛ましいこと。」と、マリーエは叫んだ。

「そうでございましょう、あなた。すべての不幸が一度にわたし達の家に降りかかってまいりました。私の姉は行方知れずになっていま

した。ルードヴィッヒが決闘で瀕死の傷を負ったという報が父の元に届く以前のことでしたけれど。二つの出来事がこの老人を落雷のように襲ったのです。—私はたった一人で破壊した家と砕け散った幸福の瓦礫のなかにぽつねんと立っていました。—私の父は死に、私の兄は墓の中です。いま私は影のようにただあちらこちらと歩いているだけです、マリーア・イリガーさん。私は今後もずっと、ずっと生きてゆくだろうことは分かっています。死者たちが彼らの墓所から復讐を求めています。復讐、マリーア・イリガーさん、復讐というものでは何が問題かお分かりですか。—　—ああ、マリーア・イリガーさん、私の復讐ではないのです。私が死者達の復讐をするのです。私の兄が生きていたなら、私はここにいないでしょう—おお、夜、死に行く兄のベッドの傍らで過ごした夜。・・・私の父の殺害者、私の兄の殺害者は生きています。—彼の若いかわいそうな女性と一緒に、ここに、—この町のここに。そして私はまだ生者の間をさ迷い続けています。美しいマリーエさん、私はあなたに殺害者の名前を教えます。美しいマリーエさん、よく聞くのですよ—」

女はその哀れな女の方へ深く身をかがめ、彼女の耳元にひとこと囁いた。するとマリーエ・イリガーはその刹那、急激な悲鳴をあげた。彼女は両腕を伸ばし、虚空を掴んだ。手に花束を捧げたひとりの男が茂みから驚いて転がりでてきた。それは若い弁護士、オイゲン・イリガー博士だった。声高な侮辱的笑いを投げながら、気を失った不幸な女の前で捨てられた女メータの黒尽くめの姿がつと立ち上がった。弁護士は石化したごとく突っ立っていた。

「わたしは彼女にちょっとだけあるお話をしてあげましたのよ、オイゲン。」と、メータはいった。あなたは嘘をお付きになることにかけてはよくよくご存知ですわ。彼女が意識を戻したら、言っておあげなさい。あれは御伽噺で、ほんの世迷言だったのだと。」—　—　—

「復讐の完了ですのよ。」と、彼女は囁いた。彼女はゆっくりと、罪もない犠牲者を再度振り返って見ることもせず、まっすぐに歩いていった。傾く夕陽は色鮮やかに黄金色に緑の木陰を染め上げ、緑の散策道は黄金色の戯れに充満していた。その色彩の中へ彼女はかすんで消えていった。

「復讐の完了。」と、オイゲン・イリガーも同じく、気を失った妻を抱き上げながら、叫んだ。彼は自分が何を言い、何をしているのか分からなかった。その両者を引き取る人々がやってきた。彼らは荒々しい魔法にかけられ、失神したマリーエを車に搬入した。その夜、マリーエ・イリガーはひとりの病んだかわいそうな子を出産し、産褥で死亡した。彼女は完全に意識を回復することはなかった。—神は彼女を憐れんだ。

*

後から後から雪は窓ガラスに降りつける。暖かに燃える暖炉の傍らの夢見る女は聞き耳をそばだてた。横丁を歩く足音が聞こえた。しかし、それは再び消えていった。夫人は改めて額を両手に埋めて、もう一度自分の思いに沈んでいった。

完全に満ちた心地よさの一瞬、心の深奥部に横たわる平安の一瞬、まるで哀れな苦しみに呻吟して止まぬ人の子に極く稀に分け与えられるあの一瞬。穏やかに注ぎ込んでくる思考の流れの幾筋のあいだに妨害するものは何もない。中途半端なものひとつ、ちぢに引き裂かれた小片ひとつ、この内なる眼を煩わすものは何もない。

こうして語り手は話し始めた。

雨になっていた。戸外の広い野原で緑の濃く繁った木の下に首尾よく逃れようものなら、人は—ほっとしながら陽気に「どうだ、自助できるものだけが救われるのだ」と云い—、自分の立っている安全地帯から見渡し、注意深い目の先に、多くの愛らしいものを眺めることだって可能になる。何故って、雨ばかり降るのではなく、そうこうする内には太陽が照ることもあるし、虹だって空にかかることもあるのだから。

このように葉擦れは音楽となり、ハーモニーとなって響く庇護者なる木の周りには色とりどりの花咲く草原が広がり、なんと、時には火花が飛び散り、閃光が走り、ぱっと一面明るくなることもある。都会ではそうは行かない。ここでは雹を孕んだ驟雨が、ただ混乱と不安とそして全く以って多大な汚濁とを、通りで襲撃した住民たちにお見舞いするだけだ。郊外で宝石を飾り立てた王妃のように燦然と輝いていた野薔薇は、果たしてこのグロッケン-トロムメル通りの街角でも、花開かせることができるであろうか。

グロッケン-トロムメル通りの街角には、しかし、ひとりの小さな十歳の少女が玄関の軒下に雨宿りをしているのだ。—小さな薔薇—一輪のかわいい小さな人間の薔薇—その名はメータ・ヴァルナーといった。彼女の隣にはひとりの老紳士が立っていた。彼はものめずらしそうな視線を、この小さな子の傍らの篭に投げていた。老紳士は有名な弁護士イリガーの執務室で、日中、いやそれどころか夜でさえ、実に頻繁に書類書きに追われている秘書のシュトゥーベンラオホであった。老人と子どもはほんの先ほど初めて知り合ったばかりだった。

「それじゃ、君の両親は亡くなっておしまいなのだね。」と、秘書は尋ねた。「おやおや、おや。それで君はアルレキン[10]の道化人形と小さなボールとかわいいお鍋を提げて叔母さんのところへ身を寄せようって言うのだね。ええ、なんとかわいそうな子なんだ。この叔母さんのことは何も知らないのだね。ふん、ふん。」

「まあ、私、メータ叔母さんのことならよく知っているわ。お父様がいつも言っていたもの。あの人はほんとうによくない人だって。でも私、ちっともこわくないの。」

「え、えッ。それでも君のお人形さんを救い出して、叔母さんのところへ連れてゆこうというのだね。—君の財産はきっとこれだけなんだろうね。」

「知らないわ、おじさん。ママが死んだとき、嫌いな男の人たちがやってきたの。そしてみんなもっていっちゃったの。わたしは今から叔母さんの家に住むの。」

「それでひとりで叔母さんのところへ行く道を探しているのだね。」

「ううん、違うわ。あそこの酒場に警察の人がいるの。そのひとがそちらへ連れてってくれるらしいの。激しい雨が降り出したとき、お

じさんが言ったの、ここでおじさんを待っていなさいって。ほら、見てよ、おじさん。あそこにやってくるわ。」

向かい側の角の地下のシュナップス酒場からちょうどひとりの市裁判所職員が上って来、子どもと秘書のほうへ近づいてきた。

「やあ、おチビさん、おとなしくしていたね。そいつはお利口さんだったね。まもなく雨も上るだろう、そうすればまた歩いていこう。こんにちわ、秘書のシュトゥーベンラオホさん、あなたもいつもお忙しそうですね。」

「こんにちわ、ハーゼンバインさん」と、秘書は言った。彼は旧知のお役人が誰だかすぐに分かった。私設秘書官の御同僚諸氏の例に漏れず、好奇心に満ちて、裁判所職員がこのおチビの孤児について知っていることを残らず耳打ちさせた。確かに悲劇ではあったが、しかしありふれた出来事であった。軽率、人のよい浪花節、将来に対する投げやり、そうしたものがそこで自分たちの役割を果たしていた。そうこうするうちに雨は止んだ。秘書のシュトゥーベンラオホはもの思わしげに頭を振って、おチビのメータと裁判所職員に別れを告げた。

裁判所の職員氏はこう言った。

「さあ、おチビさん、気をからげて、箒をお持ち。出発しなくちゃいけないんだよ。」

「そうしましょう。わたし、ちっとも恐くないわ」と、メーター・ヴァルナーは負けん気半分、泣きべそ半分で返事をした。

わたし達は横丁や大通りをいくつも抜けて、この巣なしになった小鳥ちゃんの跡を追っていこう。町の東はずれの殺風景な地域の大きな病院の陰になった場所に、ある建物が立っていた。そこへたどり着いた。その建物はあの小さな町ならば、きっと雲をつく建物の仲間に数えいれられたことだろう。しかし、ここではもっと頑強な隣人たちに囲まれて押し潰され、殆ど消滅してしまいそうであった。なぜって周りの建物はすべて四階建てに仕上がっていたのだから。三角なりをした空き地の病院広場を横切って、メータ・アイゼン嬢の住居のある建物の玄関へ通じる道が伸びていた。広場の中央部には貧弱なアカシアの木が一本立っていた。その足元にはしみのようなもっと貧弱な芝生の一画があった。

入り口までには数段の階段があった。甲高い声のむしゃくしゃしているドア鈴は、いきなり二人の人物が入来を望んだということに腹を立てた。—ハーゼンバインとメータ・ヴァルナーの二人は暗く、湿った冷たい玄関に立った。この入り口でふたりとも得体の知れない凍りつくような冷たさに襲われた。家の所有者の性格は誰もこのドア鈴の響きから鮮やかに聞きとることができたはず—かわいそうなおチビのメータ。人間嫌いの意地悪いドア鈴が暗闇から次なる問いをおびき出してくるまで、しばらくの空白の時が流れた。

「誰かいるのですか。そこにいるのは誰ですか。」

暗がりの背後からひとつの明りが現れた。弱々しい明りのもとで質問した女は、赤い上着襟の紳士と子どもがひとりそこに立ち、アイゼン嬢に面会を求めている事実を知った。

ためらいながら明りは再び遠ざかっていった。これを捧げもつ女は女主人に常になく訪問者があったことを告げるために行きつつ、こう

したことがいったい何を意味することになろうかという問いに頭を砕いたのだった。

やがてハーゼンバインとメータは階段を上って行き、ついにあるドアの前で、案内の女は言った。

「お入りください。老嬢がお待ちです。」

そっと指を使って、ハーゼンバインはおよそ警官らしくない流儀でノックした。するとドア鈴の下手な模倣のように女性の声が中で響いた。

「お入り。」

裁判所職員はまるで誰かが漆喰壁を爪で引掻いているような妙な気分になった。――メータ・ヴァルナーは発作的に彼女の案内役の上着の裾を掴んだ。―― 二つの鋭い灰色の目が陰鬱で蒼白い顔の中から不安に脅える子に向かった。顔は目の眩むような真っ白なボンネットに縁取られていた。

「奥様」と、市裁判所職員は口ごもりながら言った。それから気を取り直して、「奥さま、私、私は―いや、私どもは―手短に申し上げますと、―ここにいますのが彼女でございます。」

年老いた夫人は窓際のテーブルの前に掛けていた。その上には開かれたままの聖書があり、彼女は聖書に向かって自分の事に専念したままで、彼女の姉フランツイスカの不安げな子を抱き寄せようと立ち上がりはしなかった。彼女は姉の子に手を差し出し、ただ鋭い視線をおチビのメータに一層厳しく向けただけであった。彼女は恐がりはしない積もりだったが、その実、正真正銘ひどく脅えていた。

「私はこの子をここでお渡しせねばなりませんが、奥様。」と、ハーゼンバインは言った。次第に気を取り直した彼は警察官らしくない自分の屈した気持ちを少しばかり恥じ始めた。

「私はあなた様がお越しになられるものと、お待ちいたしておりました。こちらに裁判所が遣した書類がございます。すべて整っております。」

「お礼を申し上げます。」メータ・アイゼンは冷たく言い放った。これには北極の白熊さえくしゃみをしてしまいそうというものだ。「私はあなたを今朝ほどから待っていました。しかし、それは本題とは関係ありません。私はあなたがその子のために払ってくださいましたお骨折りのほど、お察し申します。」

ハーゼンバインは、もちろん、このかわいそうなおチビさんを即刻抱き上げ、まっさかさまに腕や脚の骨を折る危険を犯しても、階段を駆け降り、外へころがり出なければいけない感情に陥った。彼は、しかし、この感情を抑制し、精一杯、気を取り直して言った。

「おいで、メータ。叔母さんと握手をおし。そしてよい子でいるとお約束なさい。」

おチビさんは躊躇しながらも裁判所職員の上着の裾から手を離し、震えながら小さな手を叔母のほうに差し出した。しかし、叔母のほうは、彼女の冷たい指のあいだにその小さな手を握る前に、かなりの間、思いに耽った。

戸外で鐘が数度明るく鳴り渡った。それは大きな病院のなかにある鐘だった。誰かがその内側で死んだという知らせだった。このとき、

叔母は書類を手にした。ハーゼンバインが先ほど大きな書類鞄から取り出して彼女に渡したものだ。こうして、メータ・ヴァルナーは苦労と辛い困窮の満ちたこの世での呼吸に正当な資格を事実上与えられたのだった。

「さようなら。ご苦労でした。」とメータ・アイゼンは言った。それはあまりに唐突で短く、素っ気なかったので、裁判所職員は縮み上がり、深々とお辞儀をしたかと思うとくるりと向きを換えて早々にドアに向かった。しかし、ドアのところで澄んだ声に呼び止められた。

「ああ、お願いですから、この子どもっぽいがらくたの入った篭を持ち帰って下さるよう要求いたします。その子はもう恐らくそんなものに夢中になっていることはできないでしょうし、その意志も無いはずです。」

小さなメータは大きな声で泣き出した。だが、ここでハーゼンバインは一人前の男として勇を奮って、押さえつけるように言った。

「遺産の品々です。—私の関係するところではありません—おいとまします。」

そういうと彼は首を傾けはしたが、お辞儀はせずに前進した。

「忌々しい。なんていう女だ。」と、彼は外に出るや、言った。「とんでもない、あれはドラゴンみたいな女だ。」

そとに出て、先ほどの三角形の広場にやってきたとき、ようやく彼は晴々と呼吸をすることができたのだ。しかし、またもや病院の鐘が大きな音を立てて鳴った。いま、町では悪質の神経熱が猖獗を極め、貧者がまるで蝿のように死んでいった。

「しかし、とんでもない人間がこの世にはいるものだ。」と、ハーゼンバインは声に出して言った。

「おお、そうだ。わたしの人生を通じたって、あんな女見たこともない。しかし、まあ、市裁判所に勤めていると、実にさまざまな人に出会うというものだ。」———

叔母の薄暗い部屋でメータ・ヴァルナーは聖書の前に座っていた。聖なる書の幾行かを指でたどりながら、小さいけれど、勇敢な心を全力で奮い立たせて、涙を押し留める努力をした。メータ・アイゼンが孤児となった子の免責証券と亡くなった姉の手紙を読んでいる間ずっとそうしていた。

「そう-そ-れでは-し-下の席に-着け[11]と。えーと、け、結局—新婚夫婦-は来-なく-て、そ、そして—」

叔母は書類から目をあげ、このおチビさんの肩越しに本に視線を投げた。

「お前、おチビのアヒル、—新婚夫婦がやって来るだって。そうじゃなくって、結局、名誉を加える者が来なくって、お前は立たなければならないということだね。—その先を—」

一生懸命に押さえこんでいた子どもの胸にたまった苦悩が、留めようもなく溢れ出る涙の洪水となって噴出した。

「ママ、ママ。やさしい、大好きなママ。」

叔母の視線は一枚の黒いヴェールが掛けられた絵画に釘付けとなった。それは覆いを取り除いたソファーの上の壁に、二つの絵画と並んで掛けられていた。こちら二枚の絵のほうは露出し、一人の男性とそ

れよりも老けた男性の肖像がそれぞれ描かれていた。黒いヴェールの背後には、しかし、愛らしい、微笑を浮かべた小さな頭部がかくれているのだ。―かわいそうなフランツィスカ・アイゼンの肖像。白日の中に再び登場するのはいつの日なのか。

＊

風は横丁中でなんと鋭い笛を吹き鳴らしていることか。なんという荒天。こちらで雪が激しさを増しながら降り敷くかと思えば、かしこで裸の舗石が吹きさらしになる。夢見る女は改めて部屋の中を行ったり来たりする。―

まだ、彼は帰ってこないのね。

彼女は蓋を上げたピアノの前に進み、そっとキーをいくつか叩いた。かすかにそっと、彼女はハミングする。彼女の不安を打ち消すために外国の民の愛唱歌を口ずさむ。

「輝く貝を拾いて
もと在りし海へと帰さん、
やがて永遠に去り行きて、
かの者、海の歌を歌わん

さあ愚かな心をとりて、行け
故郷の家と暖炉を離れて
いとおしむものたちの歌を歌わん
この地球の涯までも」[12]

「海で濡れ輝く故郷の貝を拾え。彼らはいずこへ行かんとも、海の歌を歌う。柔らかき心をも、己が心の故郷より、己が心の炉辺より引き裂きたくば、引き裂くがよい、愛しき者たちの歌を、心はこの地の涯まで歌わん。」

街灯の定かならぬ明りと、暖炉の口から漏れて時折りぱっと燃え上がる炎の明るい輝きが部屋の壁で踊っていた。その都度、顔が黄金色の額縁から脱け出て前面に浮かぶ。が、しかし、たちどころに消え再び闇に納まる。

「彼の足音はまだかしら。」

そして語り手は語り継ぐ。

山のように仕事を抱えた弁護士イリガーの仕事部屋には、もう疾にランプが点されていた。筆記する者が走らせるペンの軋み音が紙の上を忙しく走りぬける。荒れ模様の霧の濃い秋の夜のことだった。戸外の空気も重く息苦しかったが、しかし、イリガー博士の小部屋に居座る空気はそれよりも遥かに胸ふたぐ不安を募らせた。その部屋へたどり着くには、事務を執る人々の部屋をいくつも通り抜けねばならなかった。弁護士の書き物机の上のランプは自分の投げる光でなんとか部屋のくぐもった空気を押し分けようとしていた。エレガントな書き物用ランプの冷徹な輝きよりもむしろ沼地の靄のなかの彗星の輝きに似ていた。しかし、その灯りも消えた。ほこりを被った書類や本、また

そうした類のもの一切が背後の壁へと後退し、姿を消した。こちらも同様にうず高く積まれたあらゆる種類の書類が覆いつくす広い緑色の机に向かって、弁護士オイゲン・イリガーが肘つき回転椅子に座っていた。彼は、非常に堅実で、人々の尊敬を受けるに相応しい、大変裕福な男であった。—仕舞いには羽根を焦がし、それでもなお自ら机上で死闘を演じ、のた打ち回ることに至る、あのつましい暮らしのともし火の周りでせわしく羽根を動かす貧弱で、派手な色をした、ちらちらと飛行する蚊の類ではなかった。真実、そうではなかった。弁護士イリガーは市井では完全に反対の評判を得ていた。イリガー博士の忠告に従わない審判など、それがどのようなものであれ、あらゆる随意の審判をこの有名な法律家に任せないなどという人間はこの町ではひとりとしていなかった。

しかし、— 皺のよった額を支える手はなんと痩せ細っていることか。背は丸くすぼまり、なんと悄然として見えることか。また油気の失せた羊皮紙のように見えることか。薄い唇の周囲には不快げな表情さえ浮かんでいる。表情、それは恐怖の驚愕を惹き起こしかねないものだったが、しかし、同時に同情を呼び覚ますといってよいものであった。そしてまなざし、—ひどい疲労をあらわにしていながらも、耿々として鋭さをさえ覚えさせたに相違ない両眼は前後左右にせわしなく動いていた。・・・

しかし、弁護士の手に握られたペンは書類の上を軋りながら走り続けた。隣室でもペンたちが同じ軋み音をたてて拍子をとって動いていた。隣室のペンたちの中には既に我々の顔なじみもいるのだ。あの秘書のシュトゥーベンラオホが。この人物を、我々は一年前のこと、グロッケン・ウント・トロムメル通りの町角でおチビのメータ・ヴァルナーといっしょのところを見かけているのだ。弁護士の仕事部屋の窓のカーテンは下ろされたままだった。時々、襞が揺れた。そこには大きな安楽椅子があり、ひとりの坊やが、弁護士の息子で、あのマリーエの息子がうずくまっていた。彼の松葉杖がその隣に立てかけてあった。彼はおとなしく横丁の影のような雑踏に視線を投げたり、あるいは向かい側の家の明かりのともった家々の窓の列に視線を滑らせたりしながら、何時間もそうして座っていた。彼は呼び出されることがなければ、彼はまだこうして幾時間も座り続けていなければならなかったはずだった。おとなしく、夢見るような性質が、蒼白い、繊細な表情と、そして苦悩に疲れた、黒い大きな十二歳の少年の眸から溢れ、語りかけていた。

いまようやく弁護士はペンを擱いた。二、三分間、彼は深い物思いに耽りながら、そのまま座っていた。それから、机の上の呼び鈴を振った。秘書のシュトゥーベンラオホが入ってきた。

「皆さんをお送りして、あなたもお帰りなさい。今日はこれで終わりにしましょう。」

秘書はお辞儀をして、雇い主に安らかな一夜を祈って、隣室で伝言を伝えた。ペンのうなる音がぴたりと止まった。ランプが次々と消され、事務員たちが爪先立ちで次々と滑り出ていった。

弁護士はひとりきりになった。

「マックス。」と、彼は声を掛けた。

「パパ。」

窓のカーテンンの襞が割れて、松葉杖にすがりながら、潜んでいたところから、子どもが現れた。彼は父のもとへ跛をひきながら歩み寄った。

「マックス。」と、弁護士は言った。「こちらへおいで、いい子だったね。お前がベッドへ行く前に、ちょっとお話することがあるのだよ。」

少年は父の膝にもたれ、父の顔を真正面から覗きこんだ。弁護士は我が子の柔らかな巻き毛に優しく手をおき、繊細で感じやすい少年に今まで一度も見せたことのなかった奥深い憂いに包まれた表情で、少年の顔を同じく正面から見つめ返した。

「お父様、そんな風に悲しげな顔をして僕のことを見つめないで下さい。僕がしてはならぬことをしたのでしたら、どうか言って下さい。」

弁護士は頭を振った。

「いや、そうじゃないのだ、マックス。お前は間違ったことなど何ひとつしていない。お前はよい子だ。だから、今から話すこともきっと分かるだろう。マックス—私はもうこれ以上お前の傍に居てあげることができなくなる。そのときがもうすぐやって来るのだよ、それもほどなくのことなのだよ。—」

「お父様。」

「話を続けさせておくれ。そのときが迫っているのだから。そうなるともう一緒に居てあげることはできないんだ—」

「お父様、お父様。そんなことを言わないで。」

「私の人生は気遣いの絶えないものだった。仕事と苦労に満たされた人生だった。それで可哀想な坊や、お前はいつも一人きりで居なければならなかった。泣くのはお止し、マックス。—私が言おうとしていることが分かるね。」弁護士は両手で額を抱え込んだ。「ああ、神様、すべてが荒涼とし、無となりました[13]—私の身の回りも心のうちも一切が瓦礫となり、砂漠となったのです。」と、彼はやさしく囁いた。「どうしようもないのだよ—私の心臓にかかった雲、私の頭脳にかかった雲、—私の神よ、あなたは厳しく罰し、恐懼を迫るのですね。」

弁護士は彼の以前からの悩みの中に再び落ちていった。彼は子どもの存在も完全に忘れてしまったかのようだ。少年は、父の胸に頭をひしと押しあてながら、声もなくすすり泣いた。

「お父様、お父様ったら。」と、彼は小声で必死ですがった。

しかし、父は答えず、まっすぐに目の前を凝視し続け、まるで幽霊が目の前の薄暗がりのなかを滑りぬけていったかのように、身をぴくりと痙攣させた。

「彼女が脅かしている—彼女はなんと厳格そのものだことか。」

「パパ、大好きなパパ。だれとお話しているの。」

弁護士は身を起こした。息子にキスをし、ひしと胸に抱き締めた。

「さあ、行ってお休み、ベッドへお行き、可愛いマックス。—お休みなさい、よくお眠り—さあ、私をひとりにしておくれ。」

悪しき考えに捕りつかれ、心に不気味な意志と決意をいだいた陰気な男は彼の子の唇に何度も何度もキスをした。彼は呼び鈴に応えて召使の老婆が部屋へ入ってきたとき、心に抗いつつも息子を胸から解放し、寝室へと連れ去らせた。

「お休みなさい、お休みなさい、お父様。—ああ、僕のことを少しでいいから可愛く思ってね。パパは病気なんかじゃないよ。死んだりなんかするものか。どうかもうそんな悲しいことを言わないで。」

父親はもう一度彼を腕に抱き締めた。---それが最後となろうとは。

横丁の物音はますます静かさを増していった。何故って人々は一日の労働に疲労し、いまや彼らのねぐらを求めていたのだから。—やがて訪れた静寂の中で弁護士イリガーは背後で死虫が壁の羽目に穴を穿っていく音を聞いた。この広い屋敷内で自分を除けば、この死虫以外、蠢くものはもはや誰もいなかった。そのとき、弁護士オイゲン・イリガーは自分の机の秘密の引き出しを開き、二、三通の封をした書類を取り出し、もう一度、その書類の上書きを確認し、そこに何ごとかを書き込んだ。それから彼は他の全書類を仕事机から片付け、ランプの横の封をした包みをきちんと置いた。こうしてまさしくそれはひとの視野に入ることになった。彼は深く、重く、ため息をつき、ぎくりと身を震わせ、もう一度、遠いかなたを凝視した。

「しかしこれで、私は君のそばを離れて行くのだ。君の冷たい、筋だらけの手は墓までは届くまい。私は君をのがれて行くのだ、メータ。君に禍あれ。和解のない者よ。部屋の隅でじっと聞き耳をたてているがいい、笑うがいい。勝利と。私は君を離れていく。そうすればすべてが終わりとなるのだ。君がのぞんでいたことを君は達成したのだ。マリーエは死んだ—十二年前に死んだ—、今夜、わたしの評判、私の財産のすべてが崩壊する。私も勝利を叫ぼう。私がすべてを、一切を失ったこの瞬間に。私は君から離れて行く。——墓にて。救われるのだ、救済ありて。メータ・アイゼン。」・・・

油が切れたランプは、少し前からぼんやりと暗くなり始めていた。弁護士はそれに気付いた。微笑が、—ある驚愕の微笑が彼の表情の上を滑っていった。仄かに光を放ちながら、次第に消え行く芯の炎がますます小さくなり、彼を取り巻く空間はしだいに闇に満たされていく。募る不安が一瞬燃え上がる。彼は封をした書類の隣に小さな瓶を置き、腕を胸に十字に組んで安楽椅子の背凭れに寄りかかった。

消え行こうとするランプの輝きが彼の顔をふっと照らし、消えた。そしてもう一度、もう一度と小さく火花が瞬き、やがて完全に消えた。—闇はいよいよ濃くなりながら、部屋の四隅や小さな物陰から弁護士の書き物机と安楽椅子めがけて這いよってきた—遠くで馬車の轍の音がした。——なおほんの一瞬だけのことだったが、小刻みに震え、小瓶を掴もうとする干からびた手の上を青白い光が走った。そして、全てが深い、最も深い夜へと沈んだ。

この夜、マリーエ・イリガーの死後十二年が経過し、フランツィスカの娘のおチビのメータ・ヴァルナーが彼女の元へやられてほぼ一年経ったこの夜、病院の広場の傍らに立つ家にメータ・アイゼンは座っている。そして彼女の記憶はこの夜と同様に暗かった。身じろぎひとつせず、彼女は座っていた。ただ目と彼女の目前にある聖書を繰る白いやせ細った手のみがまだかすかな生の名残を伝えていた。

人生と闘うために、人間に与えられる武器のなかには鋭いものと截断してくるものとが混じっている。悟性と幻想。この二つのものは自

殺、つまり自己抹殺にたいし自己保持を果たすためにどんなにしばしば役立ってきたことか。

おお、いかに明瞭に、明白に、歴然としてすべてがメータの目前に現れたことか、明解となり、奇蹟と変じた。

不幸せな女よ。

彼女は切っ先を心臓にあて、刀身を胸底奥へ深く、深く差し込んでいった。それが彼女の悟性だったのだ。

「私はいったいそうせざるを得なかったのか。あの若い女性を殺すことになってしまった一言を口にしたのは、ほかでもないこの私、なのかしら。死者達がそれだったのだ—墓のなかで休まらなかった死者達がそれなのよ。」

そして更に暗さをましたまなざしは紅いテーブルの上の恐ろしい本にいよいよ深く食い入っていった。光を失った声がいった。

「復讐は我がものなり。[14] 私が復讐を意志するのだと、主はお語りになった。」

「おお、神よ、神よ。もし、私が彼を—愛していなかったならば、そのときには私はそれをしたでしょうか。・・・そういうことならそれでも私が、私が。私がそれだったのです—死者達ではなかったのです。惨めな女ソフィスト。・・・ああ、私が彼を血に染まった両手のまま行かせていたなら。—遅すぎた—いま私の両手も血塗られる、無実の女の血に。これでわたし達は貸し借りなしになった、計算がきっちりとあった。いいえ、違う、違う、計算はきっちりついてはいないのだ。—私の側のほうに怒りの皿は傾く。私が彼をどんなに苦しめたか、どんなに恐怖で脅かしたことか、どんなに責めさいなんだことか、長い年月の間一貫して。どんなに彼に償いをさせ、彼を消尽させる不安のために我が身を賭けてきたことか。私は彼の靴底に不幸な運命のように貼りついていたのだ。なぜ私はこの町で暮らしているのだろうか。なぜ私は故郷を、死者たちの眠る墓を捨てたのだろうか。なぜ私はこちらへ、この町へとやってきたのだろうか。復讐と愛と—私の心の中のこの両者を誰が切り離すというのか。おお、神様、ええ、ええ、参ります。明日、私は参ります—逃れてまいります。[14] 私はもはやこれ以上彼を脅かしはいたしません。不安に陥れることもいたしません。もう十分です。—ああ、オイゲン、オイゲン。」・・・

そのとき再び病院の鐘が響く。悲しげに、むせび泣くかのように。するとファンタジーが始まる。メータ・アイゼンは椅子から驚いて立ち上がる。—誰かが彼女の陣地である椅子の横に座っているようならば、誰かの冷たい手が彼女の巻き毛に置かれているようならば、それはこんな夜更けだが、おチビのメータ・ヴァルナーのはずなのだ。いや、しかし、その子は目を覚ましはしない。陰気な叔母の厳格で探るような視線に一日中、追い回され、ぐったりと疲れ果てているのだ。

朝がぼんやりと明け染めた頃に、マックス・イリガーは夢から覚めた。ほとんどの子どもたちが見るはずのない夢からさめたのだ。彼は大きな悲鳴を上げた。

「いやだ、いやだ、お父様。そんなことを言わないで。」

混乱した頭で、彼はあたりを見回した。それは、まるで長い尾をひ

く木霊が子どもの悲鳴を聞きつけ、屋敷中の広い空間を突き抜け、甲高く反響を呼び起こしながら運んでいくかのようだった。恐ろしい驚愕がすべての廊下という廊下、部屋という部屋を通り抜けていった。たえず新しい声が恐怖と絶望の入り混じった悲鳴を伝え、広めていった。

マックス・イリガーは部屋の外でひとが走り、慌しく足早に歩く足音を聞く。まっすぐに彼は身を立て枕に座って、誰かが何が起きたのかを告げにやってくるのを待った。しかし、誰も来ない。誰も彼の不安に満ちた叫び声に気を留めるものはいない、老いたお世話係りも召使のジャンも。誰も顧みることはない。

屋敷中に興奮が進行していき、ますます募っていくようだ。遂にドアが開かれ、そして秘書のシュトゥーベンラオホが色蒼ざめ、髪も着衣も無茶苦茶なまま、跛の少年の部屋へ転ぶように入ってくる。

「マックス、マックス。」

「どうしたの。何が起きたの。僕のお父様はどこなの。お父様に何かあったの。」

「落ち着いて、落ち着いて、坊ちゃま。ちょっと考える時間を下さいまし。—おお、なんということでしょう。」と、老人は叫ぶ。彼の惑乱した目が、小刻みに震える手に握り締められ、開封された分厚い書類を走り読みした。驚愕に打たれた顔々が、時折り、部屋のドアの内側に視線をなげては、少年の視線が彼らに落ちると、すっと消えた。

「僕のお父様。僕をお父様のところへ連れて行って。」と、可愛そうなマックスはすすり泣きながら、懇願した。

秘書は彼の雇い主の最後の書類を手から落とすと、最寄りの椅子に身を沈め、両手で顔を覆った。

恐怖の光が障害をもつ子の上を照らした。鈍い予感が突如、彼の確信へと替る。

「僕のお父様は死んだの。・・・死んだの。」と、その子は叫ぶ。そして、シュトゥーベンラオホは、顔から手を離すこともなく、頷いた。

「死に、そして破産なのです。」—

多くの貧乏な人々が住む裏棟[15]も、いまや表棟の並びで起きたことを知った。あれほど礼儀正しくあれほど恥じらいを面に浮かべて挨拶をしていた偉大な弁護士が死に、自殺であったことを知ったのだった。裏棟と同じ貧乏となったというわけである。しかし、貧乏に平然と耐えていく裏棟の住人の能力が彼にはなかった。

弁護士オイゲン・イリガーは破産者となった。彼の財産の建物は苦労の末に築き上げたものだったが、それも砂上の楼閣のように崩壊した。この洗練された男のあらゆる技術、あらゆる叡智、あらゆる学識はこの転落を持ちこたえることも、押し留めることもできなかった。

父親の死体にこの孤児は対面させてもらえなかった。剥き出しの好奇心のまなざしに曝されながら、跛の少年は片隅に置き去りにされた格好ですわっていた。彼を取り巻くすべてが、渦巻き、騒音を立てていた。善人の老秘書シュトゥーベンラオホ自らが、彼の主人の子のことまで配慮するという余分なことまでしなければならなかった。確かに彼はいまや一介の乞食の子となったのだ。

有名な弁護士の訃報は瞬く間に町に広まった。牛乳配達の女に運ばれて、知らせは病院広場脇の家にも押し寄せた。そしてメータ・アイゼンの頭の周りをおしゃべりコウモリの翼に乗ってぶんぶんと飛び回った。

「彼の子が。彼の子が。マリーエのあの子が。その子は私の子、私のところへ来るべき子です。」

荒々しく老嬢は椅子から立ち上がり、帽子とショールを調えるよう伝え、家から転がるようにして出て行った。横丁を通り抜けて進んだ。太陽は次第に霧を打ち負かして、明るく、親しげに差していた。通りで出会う人々はどんなに怪訝な気持ちになったことか。メータ・アイゼンが彼らの間をよろめく足を踏みしめ、頭の被り物を目深く引きおろして速足で駆け抜けていったとき、彼らはまるで畏敬の念を払うかのように道の傍らに退いた。

弁護士のイリガーの執務室に居合わせた裁判所関係者たちは、メータ・アイゼンが入って来たとき、どんなに驚いたことでしょうか。わたし達の友人のあのハーゼンバインはすぐと彼女が誰であるか分かった。そこで彼の同僚にこの椿事の発生を知らせる目配せを送った。

弁護士の死体は隣室の藁蒲団の上に横たえられていた。メータ・アイゼンはその遺体のそばに跪いた—わたし達はこれについてこれ以上とやかく言う必要はない・・・・。

尊敬すべき市の裁判所職員たちも、この夫人が死んだ男の家なし子の肢体不自由児を引き取ることに、敢えて反対をしなかった。曾てなんの躊躇もなく、未亡人ヴァルナーの子を彼女に渡したが、その子が彼女の許で正しく厳重に養育されていることを知ってはいたのだが。

＊

薄明のなかの甘い声は別様のあり方を記録した、今度はドイツの歌謡だ。

吹雪がお前達に何を世話しようとするのか。耳を澄ますのだ。

いまや過ぎ行きて、
いまや起こりぬ、雷鳴は轟き、
雲は走る。

光明は放たれ、閃光は走る
草原が、森が。
いままさに暗黒にあるものよ、
されど速やかに晴れ行かん

いまやこと始まりぬ、
いまやことは終れり
そう、まさに一瞬の夢、
ただの狂気に過ぎぬ

小さき枝より雫は滴り

睫よりもかの如く
雫の粒は何と煌くことか
葉末にまなこに

太陽はなんと照射するものか
眩しい輝きを放ちながら
山上を、谷間を
私の心の奥底を[19]

語り手に語らせよう。

長く愛すべき一年を通じてただ一度、この日だけ、地球が太陽の周囲を回転しながら、そそくさながら、病院広場の脇に立つこの家の小さな破風窓に照準をぴたりと合わせて光を射し込む位置をとる。—この斜めに差し込んだ一条の光は床に、壁に十五分の半分ほどのひとときを遊ぶと、三六五日後のこのときにまた再訪するために消えていった。

暗く、氷のように冷たい家に比べれば、あの病院ですら陽気な生命が支配するまだましな所と言えた。この家では、クマネズミやハツカネズミは食物狩りの防止ではなく、まさに彼らのうるさい騒音のゆえに毒殺された。どの部屋も家具類が幾何学的に壁に沿って隙間なく並べられ、それらはまるで立つことが義務付けられて、そうせざるを得ないとでも言いたげだ。敷物類はすべてひどく暗い色調で、窓には鉢植えもなければ、囀る小鳥の篭さえない。猫ですら常よりそっと静かに歩く。彼らは隣家の屋根からアイゼン嬢の家の床に降り立つや、そっと爪先立って歩くのだ。

なんとした家だ。

暗い曇り日の、風の強い十一月のある一日が終わろうとしていた。またもや五年の歳月が流れていた。

遠く離れた色づいた森で、風に引きちぎられた無数の萎れた葉が、町を貫通する川の流れに追い立てられ、更に遠くへと波に浮き沈みをくり返し流れる—かつては太陽の光が周りで戯れ、蝶に愛撫された小さき死体たち。

乾いた冷たい風が、遊園地のアカシアの最後の数葉を引きちぎり、横丁で埃とともに渦巻きを起してみるかと思えば、あちらこちらへと吹き散らす。

暖炉や竈の煙突の中では風が、吼え声をあげ、悲鳴を上げている。通りでは足早に歩く人々に過ぎた暑い夏の日を思い起こさせ、一足早くやって来た冬に襟を立て、きつく締めさせる。暖炉の思い出や安楽椅子の思い出はこうした生活の快適さを要求できる町のほんの一部の住人達の心を擽るだけだ。

ますます陰鬱に、病院広場脇のこの家は灰黄色に枯れた芝生の一画を見下ろしている。それは丁度もぐら塚が三つ、四つあるミニチュアの教会の墓地といった具合で慰めようのないどんよりとした薄明かりの中に横たわっている。

陰鬱で冷たい家の地下貯蔵室はとみると、そこではちょっとした奇蹟が起こっていたのだ、愛らしく、祝福を受け、歓喜に満ちた奇蹟が。

ありがたいことに、我々の時代でもこうした奇蹟は時により起きるのです。恐ろしい危険にさらされることなく、つまり、例えば急進主義者とかあるいは唯物主義者といった人たちによって虚言に煽られるということもなく奇蹟が生じるのです。

美と眩い若さがこの家の中で光を放ち始めたことが、もっとも美しい花の開花を夢みつつ凍てつく氷や嵐に脅かされ続けた蕾が、凍結や嵐にも負けず花開かせたことが、そして、かつて稀少な神秘が啓示していたそのことが、いま、この陰鬱な、暗い古い屋敷内で何かを起そうとしているのだ。いったい何を。

メータ・ヴァルナーが五つ歳をとり、乙女となったという事実は、数千倍の苦悶と悲惨で満ちた大病院がこの家のために全明りを点して、この家の降り積もったり振り払われたりする、気難しい古い箱の埃相手にいったい何を始めようというのか。

風がなんとひゅうひゅうと吹き、軋み、吼えていることか。お聞き、あそこの屋根瓦がはがれ、通りの舗道の上に投げ出される。おお、なんと物凄い。お聞き、あれは何の音だ。

分かるものか。ただ分かることは善と美がますますその度合いを高め、そして世間はこのことにいよいよ闇濃くいよいよ邪悪に、そしていよいよ嫉み深く詰めよって行くだけのことだ。

物思いに耽りながら、愛らしいカールした髪を巻きつけた頭部を支えるのは小さな、優美な手、でもその手は濃いブロンドの髪の波の中へ深く、深く食い込む。蒼い、愛らしい目は薔薇の目蓋と絹の睫の下で静かに眠っている。—小さな、全世界に等しき広い心‐‐‐‐‐‐

おお、静かにして、世間から、冷たい世間から汝を後退させよ。汝の深奥の、秘密の内面へ後退して行くのだ。神の恩寵によってすべてのひとの心に注ぎ込まれた元の光を認めよ。そしてますます強くその光を煽り立て、汝が汝の周囲を取り巻く夜の闇のさなかにあるといえども、目のきくものとならしめよ。

まさしくこの正鵠というときに、汝は光によって満たされ、輝くこととなるだろうか。汝の周囲の者たちが驚嘆の声を発しつつ、いったい何処から、何処よりと口々に問いを発するほどまでに。—そして、この問いはたいていの人には解き明かすことができぬゆえ、それが故に汝を—罵り、嘲笑する。‐‐‐

この過ぎし全年月、長い年月を一貫して彼女の身に生じた一切のことが、いま乙女となった娘の目の前に歴然とする。最も小さき事件ながら、本当に、それがいま、彼女の全人生にかかわる最高次元の出来事と名乗りをあげている。彼女に分かち与えられた友情、好意—愛の太陽のまなざしは、なんと集中的で、なんと暖かく燃え輝き、なんと慈しみ深いものであることか。ああ、それはとてもことばでは言い表せぬ。

それは忠実なエッカートによって語られたうるわしい民話だ。[17] このことばには、ほかの民話にはないドイツ的な心情が反映されているのだ。

さまざまな様式をとり、さまざまな形姿となり形式となって、羊飼いにして警告者は現れ、彼に委ねられた存在が傷を負うことなく、さまざまに待ち設ける危険から救出されることに気を配る。

母親の肖像画は黒いヴェールの影から自分の子を見守り続けてきた。そしてこの子もまたこうしたことを承知している。

数年前、叔母はあるときこう言った。

「ご覧、メータ。あのヴェールの背後にはお前のお母様の姿が描かれているのですよ。お母様の顔は覆われています。何故って、お前と同様、あの人も軽薄な人でしたからね。それに自分の道を勝手に歩いていった人なのですからね。」

フランツィスカの子は叔母が部屋を出て行くと、母の肖像画の前に進んだ。そして小さな手を高く差し伸べた。

「ああ、お母様、あなたがそこにいて下さって、私はどんなに嬉しいことかしら。」その子は肖像画の黒い紗を外そうとした。しかし、諦めねばならなかった。

この黒い覆いに、このときからこの孤児のあらゆる思いが掛けられていった。

「あそこの後ろに私のママがいる、私の愛するママが。ママは私をとっても愛していたし、とても善い人だったわ—」

母の肖像画に向かって、この喜びの失せた子は、これから先ずっと心の悩みを打ち明け、心曇らせることどもをその陰で嚥み下した。そして課題を学び、大小の預言者の名前を勉強し、使徒の書簡の標題を勉強した。手短に言えば、子どもたちが知るように定められたことをすべて学んだ。

「やさしいママ、わたしを助けて。」と、メータ・ヴァルナーはいつも囁いて、自分の勉強を始めた。「ユーディット書、ソロモン書—トービア書、エステル書。[18]」

そうしてもしどこかで支えでもすると、叔母の目はいっそう暗く、険しくなった。するとその子は助けを求めて、あのヴェールの降りた肖像画にまなざしを送った。それで、その子は先へ進むことができるようになり、書き始める。「Bel から Babel へ、Drachen から Babel へ—」などなど。そして幸いなことにマナの祈祷にたどり着いたときも、静かにこの絵画を見上げた。

もちろんいまは少しばかり違っていた。だが、相変わらずこの娘は微笑みながら、同時に涙を湛えて、両手を膝に組んでいた。

「ああ、お母様。」

それから彼女は頭を傾け、祝福された無垢なる心で頬を赤らめ、両手を小さな鼓動する胸にきつく押し当てて、囁く。

「おお、マックス。」

あるべき予定調和が現実となったのだ。新鮮な、新たなる生命の光のなかへ愛となる運命のあるものが、いま、手に届けられた。如何に闇が根底にあろうともそこから二人の人物、マックス・イリガーとメータ・ヴァルナーは歩み出た。

あれはなんでしょう。わたし達は病院広場の脇のあの暗い家にまだいるというのでしょうか。まだ夢見るメータが隣室の叔母の足音にびくびくと耳をそばだてているというのでしょうか。

いいえ、いいえ。メータ叔母はそう死んでしまっているのです—あなた方はそれをご存知なかったとでも。

メータ・アイゼン叔母はもう数年前に亡くなっていたのです。・・・・

恐らくある足音が響いているのです。夢見る女性はさっと椅子から立ち上がり、ドアのほうへ急ぐ。—

「彼だわ。ああ、よかった。—ようやく帰ってきたわ。」

家のドアが開かれ、部屋のドアの内側に巾広いマントに身を包んだひとりの男が姿を現す。

「マックス。」

「メータ。」

雪で真っ白になったマントと帽子が最寄りの椅子に置かれた。

夢見る女性は男性の腕に抱かれ、彼の冷たい両手を彼女の暖かい手に包む。甘い、半分だけがことばとなる二人だけの挨拶が交わされた。丸いテーブルの上のランプが高く炎を上げた。風に煽られ、翻る影がぐっと後退し、部屋の一番奥の隅へ引っ込み巣籠もった。—部屋は光の中へと歩みいり、そして二人の善人がその光のなかにあった。

そこにあるのは気高く男らしい、しかし少しばかり蒼白い、濃い褐色の毛に縁取られた顔。そしていまひとつの顔は遥かに、遥かに美しい顔であった。しかし、二人とも内側の幸福に同じように明るく輝いていた。若い医学博士マックス・イリガー。ほんの少し脚を引き摺っていた。しかし、その代わり、忠実な腕が彼を支えているのだ。

さて、時は過ぎ行き、
ことは成れり
雷鳴は鳴り止み
雲は吹き払わる

いま、彼らは手に手をとって、互いに胸を寄せ合って座った。彼らはこうして、メータ・アイゼン叔母の監視下の病院広場脇の家で密かによくいっしょに座ったものだった。そのとき鏡の下の時計に依り沿って立つ白皙の像は唇に指を当てていた。家の竈の守護神たちはこぞって耳を澄まし、沈黙と囁き声の意義と解釈を捜し求める。

「外の風の音をお聞きになって。」と、メータ・イリガーがいった。

「私は随分あなたのことを心配していましたのよ、マックス。」

彼は微笑し、彼女をひしと抱き寄せた。「だけど僕は、夜道を歩き、嵐と戦いながら、この一瞬のことだけを考えていたのだよ。嵐が僕の顔に叩きつけた雪は、ただ僕を元気付けただけさ。」

彼女は美しい頭部を傾け、言った。

「今夜、私はまるでいろんなことをとくと考えてみなければいけないような随分奇妙な気が致してましたの。しばらくの間、二、三分の間でしたけれど、まるでおずおずとした子どものように脅えていましたの。あそこの私のお母様の肖像画がなかったとしたら、私はきっとあなたを捜しに横丁へ走りだしてしまっていましたわ。そうすれば、私の心の不安を打ち消せそうな気がして。」

ふたりは眼を上げて壁の肖像画のほうを見た。亡くなった母親は黄金色の額縁に囲まれてどんなにやさしく微笑みかけていたことでしょう。もはや黒いヴェールは愛らしい表情をおおってはいなかった。母が勝利をおさめ、彼女の子は幸せになっていた。・・・

「今夕、再びすべてが私の中で蘇ったのです。」と、若い夫人は続けた。「冬の嵐の所為でもあるといえばそうなのですけれど。—ああ、マックス、私たちが初めて会ったときのあの瞬間のことをおぼえていらっしゃるでしょう。」

「かわいいメータ、忘れることなどありえないだろう。間違いなく、君があの正面の部屋の大きな戸棚の隣の一隅でおずおずと壁にくっついていたのを今でも目の当たりにするくらいはっきりと覚えている。可哀想な、小さな怯えた鳩さん。不安と恐怖で一杯になった心は僕も同じことだったのだからね—」

「可哀想なマックス。」

「ああ。」と、夫は微笑み、「それにもかかわらず、ほんとに楽しい年月だったじゃないか。いま、こうして話してみると甘やかなものだね。戸外で猛り狂うにまかせている強風や荒天も、今は私たちのささやかな幸福に侵入してくることなどできない。」

「私はあなたがいない間、わたしのお母様が亡くなって叔母様の家で過ごすようになってからというもの、決して子どもらしい玩具やお人形といったそういうものをもったことがなかったことや、子どもらしい幸福とはなにかなどなにも知らなかったことなど、考えずにはいられなかったの。もちろん、マックス、あなたが来るまでのことでしたけれど。私のママがまだ生きていた頃、わたしはたくさんの玩具をもっていました。お人形やおままごと道具、それに生きた小鳥、カナリヤでしたけれど、そういったいろんなものを持っていました。パパがそのカナリヤに歌を教えました。私はその夜、一晩中それがどのような方法だったか、じっくり考えて見たにちがいないのですけれど、でも、未だに分からずじまいです。」

「その通りだ。古い、忘れてしまった玩具。」と、マックスは言った。「ちょうど折りよい時期に再び呼び出しを受けるそのときまで、その間の年月がどうであれ、忘れていてもしまっておける心のなかの一隅というものがないならば、それは人間とはいえない。メータ・アイゼン叔母もはるばると来つるものかわという感慨を知ったのだよ。ひとが生存するとは何かを。生とは彼女にとって、重い、とても重い荷物であったに相違ない。緑の教会の墓地の土饅頭など、こうした生を経験した彼女には、真実、軽いものとなったのだよ。」

若い夫人は戦慄を覚えた。しかし、夫は楽しげに喝破した。「過去は過ぎ去るにまかせよう。実際、わたし達はもう一度、色とりどりの玩具のすべてを呼び起こそうとし、それが満ちたことに驚き喜び、そうしているのだからね。」彼は更に声音を低めて、かつての神秘主義家の言葉[19]を引用して、こう付け加えた。「失ったものを再度捜し求めるということが、この世に生きるわたし達人間ほとんどに課せられていることなのだよ。そういうわけだから、さあ、わたし達も捜し求めよう、それにわたし達以外に捜し求める必要などないのだからね。」

母の肖像画は壁から見下ろし、微笑んでいた。時計は軽快に時を刻んでいた。沈黙の守護神は唇に指を当てていた。

過去、現在、未来
思い出、愛、希望

二人の夢は更に広がっていった。しかし、語り手の夢語りは終わった。ただ、脚韻詩のなかに余韻を響かせて消えていく。

二人の可哀相な、おずおずとした子がいるならば、
ひたと口をとざしてるに相違ない
紅い、温かな唇の間にぞ
苦しい思いを噛み殺さんために[20]

＊

闇の土壌に咲いたこの感動的な物語が大団円を迎えた後、今一度、語り手はお茶に誘われた。物語る間にあのときよりももっと冷えてしまっていたのですから。しかし、かの哀れな男は彼の身体と矜持の全力を奮って決別した。そうして彼は独り夜の闇を抜けて、とあるワイン酒場に立ち寄り、国民新聞[21]を葉巻一本分たっぷりと読んだ。「下劣な奴め。」

原著　Auf dunkelm Grunde　Eine Skizze von Wilhelm Raabe In: Wilhelm Raabe Sämtliche Werke Bd.3 Braunschweiger Ausgabe Vandenhoeck & Ruprecht Göttingen 1969

＊原題「Auf dunkelm Grunde」は、ドイツ文学作品に幾度も登場するフレーズである。ゲーテやアイヘンドルフの詩の引用をもって、全集のこの巻の篇註者カール・ホッペは「註」を付しているが、煩雑となるので今回は省略した。

註

（1）イーオ：ゼウスの恋人。彼の妻ヘラの嫉妬から守るため、ゼウスによって雌牛に変えられた。
（2）カルリアナッサ：ホメーロスの叙事詩『イーリアス』第十八章に登場する海神ネーロイスの娘、海の妖精の名を引用
（3）カルリアネイラ：2に同じく海神ネーロイスの娘、海の妖精の名に由来する
（4）アマテイア：2に同様
（5）エグモント：ゲーテの作品、悲劇『エグモント』からの引用と本翻訳の原書、ブラウンシュヴァイク版ラーベ全集の篇註者カール・ホッペは註を付す。エグモントは十六世紀のオランダの実在の人物である。スペイン統治下、オランダの高級貴族の一員であるエグモント侯は統治反対派の有力メンバーであったが、貴族が武装蜂起した際、それに参加しなかったにも関らず、一五六七年、アルバ公に捕えられ、翌年、絞殺刑に処せられる。しかし、ゲーテはこの歴史事実に依拠せずに悲劇『エグモント』(1788) を詩作した。
（6）そのことについちゃ、・・・　：ローマの詩人ホラティウス（前65～前8年）の『詩論・Ars poetica』に依拠する<本原書編註者カール・ホッペの註による>。
（7）マイスター・フォム・シュトゥール：すんなり「座長」と訳すべきところかもしれないが、ここでは特殊なフリーメーソン特有の語を使用しているので、それをカタカナ（Meister vom Stuhl）で示すに留め

た。フリーメーソンの儀式からの借用。フリーメーソンの支部の座長の呼称。ここでは一座の中で、「話を語る人・文化的精神の光を放つ人」ほどの意である。つまりは語り手のことを大仰に言ってふざけている。

(8) 家庭内：原書でラーベはHeimlichkeitを使用している。これに編註者ホッペは「隠蔽され、保護された場所としての家庭内、秘密保持可能な場所との意味合いを持たせてHeimに関連付けている。

(9) ガスのように発散する水分：原書はDuft。編註者ホッペはこの語　の十九世紀の当時の二重の意味の用法に注目させ、言及する。先行する「新鮮な花の芳香」以外に、湿った臭気の発散、あるいは水分の発散の意味で当時使用していた。ホッペが註をつけたことへの憶測に過ぎないが、「快適」とばかりはいえない状況の暗示。更に踏み込めば、快適な当時の市民社会の裏側の存在、胸が詰まるような臭気の存在へのラーベの感覚に留意することにシグナルを送っていると訳者は考える。

(10) アルルキン：ここでは北イタリアの都市ベルガモの悪戯好きの喜劇人アルキーノを模した人形。十六、七世紀のイギリスではコメディアンと称され、一世を風靡するが、ドイツではハンスヴルスト像としてその影響を刻む。人気を博した道化様の人形。

(11) それではあなたは下の席に行ってお座りなさい：この箇所は孤児メータが指でたどりながら聖書をたどたどしく読んでいる場面である。ホッペはルカ伝14章8節から9節の箇所からの随意の引用であると註を付す。聖書の内容を掻い摘んで説明すると、婚筵に招ぜられたならば、自ら上席に座してはならない。後から入来した貴い人に「この人に席を譲れ」といわれる。招かれたときは進んで、末席に着きなさい。そうすれば招待者がやって来て、上の席を勧め、あなたに名誉を与えるという訓話である。が、いっぽうで叔母が読み進む役所からの書類の内容とも解釈でき、ラーベは意図的に、姉の結婚が世間的に受け入れられぬものではなかったことを示唆し、姪が孤児とならざるを得なかった間の説明を行っていると取れる。

(12) 輝く貝を拾いて・・・：原書では英語の詩となっている。ホッペは註において、編集当時の段階では、確証を得ていないが、ラーベ自身が英訳を試みた外国の民の歌謡であり、この歌謡の文句を織り込むに当たっては、人々の口に歌われ、心に泥んだ民謡であること、それ自体にラーベは意味を持たせたと、解している。

(13) すべては荒涼とし無となりました：旧約聖書モーゼ第一書一章二節よりの引用。『旧新約聖書』（日本聖書協会・1975）の訳は以下の通り。（地は）定形なく曠空くして。

(14) 復讐は我がものなり：旧約聖書モーゼ第五書三十二章三十五節よりの引用。『旧新約聖書』（日本聖書協会・1975）の訳は以下の通り。（彼らの足の躓かん時に）我仇をかへし應報をなさん・・・

(15) 裏棟：都市建造物と生活実態について、『知られざる魅惑の都市たち』（平田達治著・世界思想社／2007年）の中に、通りに面した豪華な外貌の表棟と内庭を挟んで立つ日当たりの悪い裏棟とに映し出される富と貧困、光と影の生活を、「逆ヒエラルヒーの住み分けの法則」と称し、核心をついた説明を見る。エレヴェーターの設備なしの十九世紀の都市建造物では、貧者は上階へ、上階へと追いやられ、満ち足りた人々の快適な生活の上に幾重にも貧乏人の墓場が積み重なり、果は金が尽きれば最上階の洗濯部屋へと、つまりは「天国まで身を落とす」という具体的、且つ剥き出しの現実が報告されている。

(16) いまや過ぎ行きて、・・・　：ラーベの作詩

(17) 忠実なエッカートによって・・・　：グリムのドイツ民話集第一部『忠実なエッカートの話』

(18) ユーディット書、・・・以下、マナの祈祷まで：旧約聖書の補遺から派生した黙示録の書の表題。挙げられた例は行きすぎた正統派の、無意味な子どもの虐待に堕す危険のある、世と共に歩く叔母の教育方法を解き明かし明示するものである。

(19) 編註者ホッペは神秘主義的思想家にして神智学者のヤーコップ・ベーメ（ゲールリッツ生：1575～1624）の著書、『Das dreifgache Leben』第四巻100ページの参照を指示。

(20) 二人の可哀相な、・・・　：ラーベの詩。
(21) 国民新聞：　原書ではdie Nationalzeitung。一八四八年から一九一〇年までの間、ベルリンで発刊されていたナチオナルリベラル（国民自由主義的）な新聞の意であることをホッペは解説する。

訳者あとがき

W.Raabe（1831～1910）は一八四八年の「三月革命」当時、十六歳数ヶ月の少年であった。しかし、彼はこの革命の関係者達が刑に服するため列をなして進む姿を見聞し、且つマグデブルクで書店員見習いとして幽閉先の城へ注文書を彼らに届けるあるいは小さな会合で討論の模様を目の当たりにすることを通じ、革命の意義を国民集会に参加するという実際行動へ結びつけていけるほどに自分の問題と化すことにまで至る。自由で民主的な近代国家建設は当時の知識人の多くが共有する思想であったが、彼においては終生不変の創作活動の原点ともなった。彼が社会批判家としての一面を作品の中に盛り込んでいったことは周知の事実である。それを「社会批判の失調」と捉えるか、あるいは社会状況をよく理解し、「果敢な行為」と捉えるかはラーベ研究家の意見の分かれるところである。一八七一年を境界にして、ラーベの文学が諧謔性を増すという評価を下すH.ヘルマース説を視野に収めながら、昨年、『ドイツの月光』（1871）を翻訳したのに続き、今回は七一年以前の作品『闇の大地』（1860）を翻訳することとした。

ラーベの作品が紹介されることの少なかったことによる不都合を幾分かでも緩和し、日本におけるラーベ評価の修正と定着を願うものである。

キーワード：W. ラーベ、『闇の大地に』、枠小説、（ドイツ）詩的リアリズム期の作家、翻訳

Nachwort

Das Werk "Auf dunkelm Grunde" hat Raabe im Sommer 1859 begonnen(Tgb.). Aber nach kurzer Zeit wurde die Weiterführung hinter anderen Arbeiten zurückgestellt. Erst am 22. September 1860 hat er wieder diese Erzählung begonnen, wie das in seinem Tagebuch notiert. Bereits am 4. Oktober 1860 hat er das Werk, "Auf dunkelm Grunde", beendet.

Diese Erzählung, die die Rahmenerzählung ist, enthält drei zeitlich geteilten Schichten, wie Raabe selbst in der Erzählung genannt hat; Vergangenheit, Gegenwart, Zukunft! Noch dazu hat er die Bedeutung dieser drei Wörter dahinter hinzugefügt; Erinnerung,Liebe,Hoffnung! Diese sechs Wörter kann alles der Innenerzählung zusammengefasst erklären.

Aber vom Aspekt der Gesellschaftskritik zeichnet sich die eigenartige Funktion des Rahmens dieser Rahmengeschichte ab. Im Rahmen dieser Erzählung hat Raabe das alltägliche, bequeme Leben des Bürgertums mit kurzen, scharfenund gegen damaligen bürgerlichen Geschmack kritisierten Wörtern und die Kritik an der Zeit dargestellt. Hier in diesem Werk hat er absichtlich die Eigenschaft der Rahmengeshcichte dafür verwendet. Damit kann er eine reine

Handlungsgeschichte konstruieren, die selbst auch eine Rahmenerzählung ist, d.h. die doppelte Rahmenerzählung. Im zweiten Rahmen, dem Rahmen der Innenerzählung, hat Raabe das gegenwärtige Geschehen im Präsens geschildert. Deswegen muss und kann einander die Grenzlinie zwischen dem Rahmen und der vom Erzähler erzählten Innenerzählung einsickern. Darin kann das Publikum Raabe als Künstler genießen.

Schlüsselwörter : W. Raabe, Rahmenerzälung, "Auf dunkelm Grunde", Bürgerlicher Realismus, Übersetzung